

避難所ICチップで管理

広工大運営効率化へ実験

広島土砂災害

8年

営事務が煩雑なスタッフの負担を減らす効果を見込む。避難訓練での実証実験を重ね、実用化を目指している。

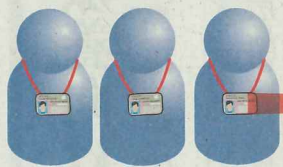
り機が次々と情報を取り込み、3倍近い25人を確認できた。食料の配布確認も円滑にできたという。2014年の広島土砂災害を含む一般的な避難所では、避難者の入退室や物資の配布状況は紙の名簿で管理してきた。手作業で情報を更新するため、時間と労力を要し、確認ミスが起きることもあった。同連合会の柳迫長三会長(72)は「システムが導入されれば避難所の運営はとも楽になる。ただ、実際の運用には個人情報扱いに關して住民に理解を求める必要がある」と指摘する。

広島工業大(広島市佐伯区)は災害発生時の避難所で、集積回路(IC)チップを使い避難者の入退室や食料の配布状況を一元管理するシステムを提案している。運

量販店などの商品の在庫管理の仕組みを参考にした。避難所を訪れた住民にICチップ付きのカードを配り、名前や年齢、持病などの情報をパソコンに入力してチップと関連付ける。カードを読み取り機に近づけると入退室や、食料や支援物資の配布状況をデータで管理できる。

読み取り機はカードと数分離れていても感知するという。所在確認の際、スタッフが避難者の名前を呼ぶ必要もなく、ソーシャルディスプレイも一定に保つことができる。

ICチップを使った避難者情報の把握



ICチップ付きのナンバーカード

避難者

読み取り機

パソコン



- ・避難者の所在確認
- ・食料や支援物資の配布状況の管理
- ・避難者の体調など

広工大は今年3月、システムの

試作品を安佐北区の落合学区自主防災会連合会が開いた訓練で運用した。参加者たち約130人をカートのない班とある班に分け、所在確認を実施。ない班は名前を呼んで返答を求め、1分間に9人を確認した。一方、ある班は読み取

同大IoT・AI・データサイエンス教育研究推進センターの林孝典センター長は「避難生活が長期化するほど、運営スタッフや避難者の負担を軽減する効果が期待できる。使いやすいシステムに改良し、活用を広げていきたい」と話している。

(浜村満大)

住民の入退室や食料配布状況